

2021. 4. 11. 主日礼拝説教
聖書：ヨハネによる福音書 21 章 15-19節
『愛するという手続き』

▼学生時代にカルカッタのマザー・テレサの施設で働いたことがあります。

「死に行く人々の家」と異名を持つ施設です。そこには連日行き倒れの人々が担ぎ込まれてきます。すでに手遅れで介護の甲斐もなく亡くなる方は多勢います。しかし、人生の最後にあって彼らの多くは初めて人として手厚く遇され、尊厳のうちに召されてゆきます。やさしく声をかけられ、骨と皮に痩せ衰えたその体をさすられ、暖かいスープを口に運んでもらい、一筋の感謝の涙と共に逝くのです。

▼彼らは疲弊した農村から都市に流入してきた人々です。当時、その数は数百万人とも言われました。カースト制度の厳しいインドでは、都市に出てきても彼らに生活する余地は残されていませんでした。戸籍はもとより、職に就く権利も、医療、教育、住環境すらありません。路上で生まれ、路上で生き、そして路上で死を迎えます。

▼街には彼らの子どもたちが沢山います。けれども多くが失明し、手足が不自由なのです。シスターによると「健康に生まれてくるわが子を喜ばない親がいるのでしょうか。彼らは貧しさゆえに、生まれてきたわが子の目を針で潰し、手や足をねじ曲げ、折るのです。それは、この子が健康に育ったら餓死してしまうかも知れない。でも、障がいを持っていたらひょっとして人の施しを受けて何とか生き永らえてくれるのではないか。」と考えてしまうからだと困った様子で語ってくれたのがとても衝撃でした。

▼そこには理解しがたいのではなく、理解してはいけない愛の形があるのです。彼らも条件さえ満たされれば、決してそのような行為に及ぶことはありません。いつの時代でも、どんな状況でも、いつも愛の名の下に被害に遭うのは弱い者・小さい者なのです。

▼国家が権力によって国民に愛を強制する時、そこで一体何が起こったかをわ

たしたちは決して忘れてはなりません。教育基本法が改悪され、憲法さえねじ曲げられようとしている現在、愛国心がいかに弱く小さい者たちを打ち殺したかを忘れてはいけません。愛は権力によって強制されるものではないのです。

▼ヨハネのオリジナルな記事が描かれます。ここにはイエスとペトロの対話がなされます。三度、「私を愛するか」というイエスの問いがペトロに投げかけられます。アガパーンとフィレインという「愛する」意の動詞が互いを交差します。ここでおそらく大切なことは、それらが哲学的思弁のやりとりではなくまさに困苦の中に生きるペトロに代表される「人」の現実そのものが描写されているということでしょう。それは、困苦に向き合えず、愛を言い訳に抜けたそうとするわたしたちの生なかな姿なのです。

▼福音書とは初期キリスト教の共同体の証言です。その働きは、当時の社会が圧殺する人々―障がい・病・高齢・幼児・女性・異邦人・職業等―と歩みを共にすることを福音として位置づける作業だったと考えます。

▼イエスはペトロに応えます。「わたしの羊を飼いなさい」と。「愛するか」という問いの答えは、困苦から逃げ出すことではなく、そこに留まること、そこで戦うこと、そして生きることなのです。それがはたして「愛するという手続き」なのだとヨハネは証言するのです。わたしたち教会に集う者は、いつもこのイエスの問いかけに問われ続けていることを忘れてはならないと思います。